



令和3年3月号

西公民館だより

(弥生)

朝晩の肌寒く感じる風も陽が昇ると柔らかな日差しに代わり、例年であれば各地の春まつり等の行事に人々の心も浮き浮きする筈ですが、蔓延し続けるコロナ禍は収束の気配が無く日常生活の行動にも自粛や制約が余儀なくされています。

このため、西公民館でも感染防止の措置を行い開館していますが、来館時にはマスクの着用や手の消毒と検温を行い3密を避けるなど、徹底した感染防止策を講じてご利用いただけますようご協力をお願い致します。



(福寿草が咲きました)

館長 志村 克美

主事 津田 はるみ

作品展示会のご案内

西公民館の各教室参加者と地域の皆さまから出展していただいた文芸作品の「展示会」を開催しています。

公民館をご利用される際に、館内の展示作品を鑑賞していただきますようご案内いたします。

記

展示期間 令和3年3月 1日(月) から
令和3年3月31日(水) まで

展示作品 短歌、川柳、絵てがみ、筆ペン字、
クラフトバンド・バックなど、

子ども舞踊教室のあゆみ

西公民館の「子ども舞踊教室」は、5名の園児が廣瀬嘉子先生からボランティアでの指導を受けて始まり、今年7年目になりました。

今年度はコロナ禍により舞台での発表こそありませんでしたが、これまでに園児と小学生の13名が市の文化祭や県民文化ホールの大きな舞台に参加し、先生から提供を受けた揃いの衣裳で唯一の子ども舞踊を演じ、見事にお稽古の成果を発表しています。

こうした子どもさん達は、舞踊の心得をはじめ手足の動きや首の振り方、扇子の開き方などの基本動作と舞踊の魅力を学びながら楽しんで稽古を続けていますので、舞踊に関心を持った子どもさんは一緒に楽しんではいかがでしょうか。

なお、公民館の「子ども舞踊教室」の取り組みが山梨日日新聞に取り上げられ、2月9日の紙上に掲載されましたので記事を紹介させていただきます。



(市文化祭と県舞踊大会で唯一の子供舞踊を発表しました)



(土曜日毎にお稽古を楽しんでいます)



(お稽古に励む子どもさんの楽しげな様子)

(山日新聞令和3年2月9日掲載) ↓

日本舞踊子どもに指導

公民館で教室7年

甲州市塩山上塩後の広瀬壽子さん(79)は同所の西公民館で、子どもたちにボランティアで日本舞踊を教えている。県舞踊連合会に所属し、指導者でもある広瀬さんは「子どもたちに日本の伝統文化を継承することが舞踊人生の最後の務め」と語り、踊る楽しさを伝え続けている。

伝統継承「最後の務め」

広瀬さんは幼い頃から踊りが好きで、盆踊り大会などのコンテストで優勝。40歳ごろから本格的に舞踊を習い、日本舞踊の一派である西踊流に入門した。県舞踊連合会にも入り、市文化協会などで一般の会員などに指導している。

子どもたちへの指導は西公民館の依頼を受けたことがきっかけ。「最初は教えられるか不安だったが、大好きな踊りの魅力を伝えられる貴重な機会」と引き受けたという。2014年から毎週土曜日

に教室を開き7年目。教室を始めたころに保育園や幼稚園で年長児だったら人は、小学6年生になった。現在は園児と児童13人が広瀬さんに美しい手足の動かし方や扇子の開き方など基本的所作のほか、礼儀、マナーを学んでいる。広瀬さんは自ら踊って手本を示し、優しい口調で目線や足の運びについて助言する。

児童の意見を取り入れ、振り付けをすることもある。踊りを習う甲州・塩山南小6年の広瀬果保さんは「日本舞踊は女性らしいおしとやかな動きがきれい。この春で教室は卒業してしまうが、いつかまた踊りたい」と話す。広瀬さんは「子どもたちが一生懸命に練習して上達していく姿を見るのが楽しい。日本舞踊の奥ゆかしさを小さなころから感じてもらい、しなやかに美しい所作を身に付けてほしい」と話す。80歳近くになり、最近足腰の痛みもあるというが、広瀬さんは「踊れる限り若い人たちに踊りを教え、日本舞踊の魅力を伝えながら、豊かな感受性を育てていきたい」ときっぱり。積極的に踊りを継承する気持ちは衰えていない。

(山日新聞2月9日記事・掲載写真は省略しています)



ふれあい文芸

下西区「いきいきサロン」川柳部

雀来て南天の赤食べつくす

秋山 寿子

手を合わせ天の岩戸が開くように

古屋 孝子

今日もまたテレビ賑わす新型コロナ

吉野富士子

ザクザクと音心地よい落ち葉道

望月八重子

大笑い涙流して声かすれ

鈴木 節子

正月は餅をついたが尻餅を

若杉 政子

病害で我が家の柿は全滅だ

三森 郁子

福寿草元気に今年も庭に一杯

高木 ミチ

長すぎるステイホームでへこたれる

吉川 燁子

脳トレと歌でふやそう脳貯金

根岸 詩子

三六〇度空陸分けて尾根走る

石原 幸子

いこばえ塩山短歌会

神棚にお飾りをしお供えをしてクリスマスのお祝をする

玄関の南天も真っ赤に笑みており師走の風に揺れ動いている

網野 信子

万両に日本水仙添えて活け一人静かな新年迎える

孫よりの年賀状のおみくじは大吉なりて幸ある予感

小林 節子

新年も外出自粛が続きおり会食も駄目気分は暗し

高齢者コロナ感染危険だと日々行動注意しながら

古屋 和子

我が事は出来るるかぎり吾の手でいつまで出来る望みは続く

強風の覆いのポリの飛ばされて青く伸びいし蕪は黄色に

武川 玉子

時折に山茶花の散る山の湯に目を閉じ湯の香いっぱい吸う

何事も歳のせいにせず頑張ろう新年の日の出を深く拝む

古屋 初子